



TITLE:

去る三月27日のペルーの金環蝕

AUTHOR(S):

---

CITATION:

去る三月27日のペルーの金環蝕. 天界 1941, 21(242): 249-249

ISSUE DATE:

1941-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168239>

RIGHT:

右下方にある金星は相当強い光を輝かせ、火星はその上方に銀灰色ににぶい。左下にはるか太陽面より遠ざかつて小犬星座の $\alpha$ 星がピカピカと光つてゐるのも見える。生光の際のあの強い電撃性の光——ダイヤモンド・リング——に瞬時今までのコロナは、かき消されて、影像のみは残る、眼底深く残る。永劫にその神秘的な偉大さと光輝は残る。

同時同条件観測の人々と地上に作圖して観測結果の印象を話し合ふ。いづれもが左右の各々の長さは太陽径の7~8倍、上下のものはそれよりも長く夫々10倍程のものである事、地上に描く暗黒太陽の直径と見たまゝのコロナの延長とを綜合する時、皆一様にその雄大さに驚愕してゐた。同じ場所で初虧より引續き観測してゐた人々にとつては“ヒトデ型”とでも名づけらるゝ程の太陽の直径の2倍乃至は3倍位の放射を見たのみであるのに、自分達はより偉大なより神秘的なコロナの型を見た。

私はこれを“十字型”と名づける。私の準備は……室内での30分の休息、あの焦燥のあの暗黒な金庫内での20分の瞳孔調節……夫等の人々に比べて3倍以上のコロナの輝きを見た事になる。こうした事が確認された時、私は山本博士の指導された方法を遵守した事の効果に感激し、遙かにオムスクの天をにらんでをられた山本博士に對して深甚の敬意と感謝とを捧げた。

### 去る三月27日のペルIの金環蝕

去る1941年三月27日、南太平洋で金環蝕が起つたことは本誌に度々記した通りで、之れが見えた陸地は南米ペルI國のリマ市附近だけであつた。ペルIに因縁の深い山本博士は二月7日リマ市の有力新聞 El Comercio 紙に此の日蝕の詳細を寄稿し、又、博士を名譽教授とするサンマルコス大學理學部へは観測技術上の注意を書き送つた。ところが、近着報によれば、當日、リマ市では、始め天氣は良かつたが、金環蝕の見える16時39分（地方時）の少し前から雲が現はれて、観測を妨げ、寫眞撮影等は不可能で、只、眼視観測者に或る程度の満足を與へたに過ぎなかつた由である。

### モアハウス總長逝く

1908c といふ珍しい彗星を發見したことにより天文界に廣く知られてゐるモアハウス氏は去る一月21日逝去した。氏は本名を Daniel Walter Morehouse といひ、1876年米國ミネソタ州 Mankato 村で生れ、1900年アヨワ州デモイン市のドレイキ Drake 大學を卒業後、母校の教授となり、1922年に同大學總長となつた。尙、1909年夏期は志願助手としてヤーキース天文臺に勤務し、1911~12年にはカリフォニヤ大學に夏期講師となつたこともある。（天界36號14頁參照）